学童保育が六年生までになった

―上越市の五日制のとりくみ―

編集部

上越市の「学童保育拡充をもとめるカギっ子ゼロの会」会長板垣芳枝さんと事務局長相川郁子さんを訪ねて、この春四月からはじまった学校五日制にあわせた学童保育（児童クラブ）の拡充にまわりのお母さんたちと力をあわせて学童保育対象の子どもたちを三年生から六年生に引き上げて預かってもらえるために奔走されたお話を聞きました。

学童保育の対象学年を引き上げて下さい

来年度から始まる学校完全五日制の中で土曜日の児童クラブでぜひ四年生以上をあずかって欲しいというお母さんたちの声をどのようにして市の政治に届けるかを必死に考えました。

「方法がありました。今戦われている市長選挙の二人の市長候補に公開質問状をだして、その回答を文字通り市民に公開して、当選したら必ず公約を実行してもらうようにお願いすることでした」

私はお話をしていただいた二人のお母さんのテキパキとしたお話振りに脱帽しました。民主的で庶民感覚をもつ若い市民層が上越市に着実に育っています。お聞きした上越市の学童保育の学年対象引き上げについ

ての公開質問状の要旨と市長候補の回答の要旨は次の通りです。

公開質問

私たちの会は学童保育の対象学年は通年は四年生まで、長期休業中は六年生まで必要だと考えています。これについてどうお考えですか。

市長候補の回答

木浦候補―同感。市独自の予算をたてても学年の延長をすべき。

宮越候補―同感だが、市独自の予算はたてず県や国に制度改善をもとめる。

お母さんたちの願いにすぐこたえてくれる回答をくれた木浦さんが当選しました。

「約束はたしたよ」と木浦新市長さん

「新市長に、あらためて次年度から学童保育拡充を取り組んでほしいと要望書を提出しました。また十二月の市議会で樋口良子議員さん（日本共産党上越市議）

要望書

平成十三年十二月　日

木浦　正幸　市長　様
こども福祉課　課長　様

学童保育拡充についてのお願い

学童保育の拡充をめざすカギっ子ゼロの会
代表　板垣　芳枝
事務局　相川　都子
連絡先　四五―三一九九

日頃、子供達の福祉、学童保育の運営につきましては、ご配慮とご尽力を煩わり深く感謝申し上げます。

私達は、学童保育を利用する共働きや、ひとり親家庭の親の会です。私達にとって、待ち望んでいた学童保育が創設されたことは、大変喜ばしく有難いことでした。しかし、現在の施設では、小学三年生までしか利用できず、四年生に進級する壁を乗ばなしで喜べないのが現状です。四年生からの「かぎっ子」の不安と負担は大きく、近年の子供を狙った犯罪や非行、大雪や雷など天候の急変、火の元、食事やおやつ、病気やケガ、来訪者、ひとりぼっちで寂しくないかなどの心配はかりしれません。子供達が放課後や長期休暇を安全に過ごし、成長する場としての「学童保育」は極めて重要だと思います。

また来年度からの完全週休二日制が実施されれば、その必要性は、益々大きくなるのではないでしょうか。

私達保護者の心情をお察し下さいまして、要望の趣旨をお汲み取り頂き、来年度からの実施を切にお願い申し上げます。

要望項目

一、対象学年の延長

学童保育は、通年は少なくとも四年生まで、長期休暇（夏休み、冬休み、春休み）は、六年生までとして頂きたい。

二、学童保育の施設拡充

学童保育の待機者ゼロに向け、学童保育の必要な子供は、どの子も入れるように施設を施設拡充して頂きたい。

にこのことについて一般質問をしていただきました。樋口さんは日頃から私たち母親や婦人の願いを議会に伝え、その願いの実現に力を貸して下さる議員さんです。議会での樋口さんの質問にこたえて市長さんは『学童保育について一層整備拡充する』と力強く答えてくれました」。

「二月二十日、新市長と私たちの会との交渉が持たれました。席上で市長さんは『来年度から学童保育九ケ所ある放課後児童クラブをさらに二ケ所増設します。そのための具体的措置を三月の市議会に提案します』と回答してくれました。市長は同席して下さった樋口市議に『十二月議会で答弁した市民との約束は果たしたよ』と語られたそうです。PTAからも学童保育の拡充について要望がだされていたことも大きな力でした。土曜日のこどもの居場所の問題は親たちが心を痛めていた切実な子育ての問題なのです。この要求は世論となり政治をうごかしました。」

春が来た！

諦めていたけれど…

来年は上の子が4年生になり、下の子が入学します。下の子だけでもと思っていたけど、兄弟バラバラにならずに本当に良かった。

（国府小三日月クラブ３年の母）

お金かけてもと思っていたが

こんど4年生になるので、1万円くらいかかっても春からは民間に預けなければと考えていましたので、本当に助かりました。

（同上　3年生の母）

市長交渉に参加して

「実り」の場に立ち会い、感激

進級の時季が近づき、1年前に比べれば、確実に成長している我が子の姿を素直に喜べない状況の人がいる。

その姿は、やがて2年後の私の姿でもある。

そんな危機感、不安な思いが、この会との出会いを引き寄せてくれたのだと思います。

学童保育の対象学年延長等の訴えを、市と交渉し続けた会の皆さんの熱意ある活動と、共産党の樋口市会議員の懇親なひとかたならぬご尽力の集大成ともいえるような市長との話し合いの場に同席出来た事は、とても素晴らしいことでした。

この問題に直面している多くの親子の声に、すばやく応えた市長の素晴らしさにこれからも期待したいと思います。

国府小三日月クラブ1年生保護者　寄稿

教育行政の継続性支える地域子育て共同の積み重ね

現在、上越市には上記の児童クラブ（学童保育）が十一ケ所、児童館三ケ所そしてこどもの家が三七ケ所もあります。

この中で、こどもの家の活動は歴史が古く、すでに二〇余年の活動歴があるそうです。町内会で土地を探し、その上に上越市が遊技場と児童図書室をもつ建物を建てました。

「子どもの家」は宮越前市長の前の植木市長と共産党の田中徳光氏が市長選挙で争った時、田中氏の掲げた公約のひとつだったものが、その後の運動で議会や市の政策にもとりいれられたものだそうです。

ここはまた地域の力でみんなで築いた老若男女が集う地域の憩いの場です。この施設の見学に各地域からこられる人がたくさんいるそうです。

上越市にはこのように地域のなかで子どもたちを共同して育てる住民の取り組みとそれが市の施策に取り入れられ実現してゆくながれが脈々と息づいています。

上越市の児童クラブに六年生まで入れて欲しいという運動はこのような積み上げてきた母親たちの「子育てを共同で築いて行く」という流れ、それに応えて行政が動くという流れの二一世紀の新たな胎動です。

（本田敏彦）

広報じょうえつ二〇〇二年六月一日号の表紙より